ステラになってＳＡＯで大暴れ！

メア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ステラになってＳＡＯで大暴れ！

【Ｎコード】
Ｎ２２６６Ｚ

【作者名】
メア

【あらすじ】
ソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）の世界に神から頂いた、叡智を持って転生したボクは、叡智を使いＳＡＯを楽しもうとしたら、父親が銀行強盗をして、幼い少女に殺されてしまった。
しかも、殺した幼い少女の家に引き取られて住む事になりました。
これはどうにかしないといけないっ！
そして、ボクの容姿がブラックロックシューター・Ｔｈｅ　Ｇａｍｅのステラなのに男って何！？

ヒロインはシノンとシリカが確定。
テイルズキャラも出てきます。

原作崩壊があると思います。シノンをアインクラッドに突っ込んだうえに狙撃銃を持たせるので。
この小説は出来る限り、アインクラッドの７５層までを書こうと思っています。

ソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）？

皆様、はじめまして。ボクは朝田錬（旧姓篠原）というしがないソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）に転生した男の転生者です。
現在の家族構成は、祖父母と母、妹……ちなみに、全部義理だよ。
はい、お気づきの方はいますが、転生先からして、妹はシノンこと朝田詩乃。

詩乃との係わりは簡単で、詩乃が殺した銀行強盗犯の息子がボクなんだ。そして、本来ならたらい回しにされたあげく、施設に送られるはずのボクを詩乃の祖父母は、責任からか分からないけど、ボクを引き取ってくれたんだ。

最初こそ、詩乃は心を閉ざしていたけど、小学生のころから嫌われながらもずっと詩乃の側にいて、支えながら詩乃の為にいろんな事（外敵排除や身代わり）を二年間していたら、中学生にあがった時くらいから、心を開いてくれるようになった。

詩乃が心を開いてくれた後、転生特典の知識を利用して、義理の母に催眠術の暗示やカウンセリングを施して、元の正常な精神状態にしてあげると、詩乃の好感度はＭＡＸになったみたいだよ。
それから詩乃は、好意と父親を殺した罪悪感からか、逆にボクに尽くしてくれるようになった。
むしろ、依存の領域に入っているよ……だって、中学生になっ

ても一緒に寝たり、お風呂入ったりと詩乃はトイレ以外、常に一緒にいるから……ちょっ、物投げないで、リア充死ねとか言わないで！
あと、色々詩乃にやったせいでＧＧＯ（ガンゲイルオンライン）の髪の毛の色が違うだけのシノンの姿となっている。

「お兄ちゃん、気持ちいい？」

「うん、いつもありがとう」

「気にしないで」

今は、一緒に風呂に入って揚がった後、自室のカーペットに座って、長い髪を詩乃にドライヤーで乾かしてもらいながら、髪の毛のケアをしてもらっているんだよ。

「よし、完成……うん、完璧」

「いつもの通り？」

「うん、お兄ちゃんはいつも通り綺麗だよ」

「そう……」

そう、ボクの問題点のひとつは容姿だ。容姿端麗なので普通なら問題無いんだ……女性ならだけどね。
神様は何をとち狂ったのか、ボクの容姿はブラックロック★シューター　ＴＨＥ　ＧＡＭＥの主人公ステラにそっくりなんだ。
街を歩けばほぼナンパされるから困り者だよ……本当にね。

「さて、ボクはいつも通りにパソコンを使うけど、詩乃はどうする？」

「私もいつも通り勉強かな」

「分かった」

詩乃がその辺にある本を取って、ボクの背中に自分の背中を合わせて座り、重力や風力などの本を読んで詳しく勉強しだした。

これは、当然、ボクの差し金だよ。

ボクはパソコンに向かって作りかけの薬のデータを開く。

ボクが作っている薬はＨＩＶとＡＩＤＳの特効薬……つまり、《絶剣》ユウキこと紺野木綿季とその姉を救う為だ。

なぜ、ボクがこんな物を作れるかと言うと、神様からいつの間にか貰っていた特典が様々な事についての叡智だ。

強化系ですら無いから肉体的には辛いかもしれないけど、ユウキさん達を救えるなら“いいや”と思ったよ。

「よし、出来た～～」

「お兄ちゃん、何が出来たの？」

「ＨＩＶ……ヒト免疫不全ウイルスの特効薬とＡＩＤＳ……後天性免疫不全症候群の特効薬のデータだよ♪」

「……簡単に言ってるけど、それって凄い事だからね？」

「あははは」

ボクの叡智はその事に深く考え続けると、様々な情報が浮かんで

来るから、それを整理して組み合わせばできるんだよ。

「お金にだって不自由してないのに……」

「まぁまぁ、気にしたら負けだよ」

携帯を取り出して、義母に電話をする。

ちなみに、詩乃とボクは都会の中学に進学したので、二人暮らしだよ。

『二人とも元気？』

「うん、元気だよ」

「こっちは問題無いよ、母さん」

しばらく、お互いの近況報告をしてから本題に入る。

「義母さん、これの特許と実物を作って紺野って人達に無料で投与して」

『知り合い？』

「父さんの知り合いの子供さん」

二人共、複雑な表情をしたけど特に問題は無いはずだよ。

『まぁ、錬のお陰で私はアーガスの社長になったけどね』

ちょっ、それ死亡フラグじゃないですかっ！？

「おめでとう」

『詩乃、ありがとう』

「義母さん、とりあえずおめでとう。頼んでおいた製薬会社の買収はどうなった？」

『当然、必要そうなのは何から何まで全部押さえたわよ。その代わり、ＯＳで稼いだお金も三割消えたけどね。こっちは個人経営にしてあるからやりたいように出来るわ』

ＯＳは引き取られてから、即座に作ってネット場で販売したら、世界中で馬鹿売れしたよ♪

さすが一世代先の技術です。さらに、次の年に新しいＯＳだしたら、またまた馬鹿売れだったので、個人資産が国家予算個人国家並になったから、義母さん達にお金を沢山渡したんだけど、いつのまにかアーガスの社長ですか……やばいよね。

「じゃあ、この薬達を作って臨床試験通ったら、いつもの通り販売よろしくね。ボクの事は秘匿でお願い」

『任せて。そうだ、茅場晶彦って知ってる？』

「知ってるよソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）を作ってる人だよね？」

『ええ。貴方に技術協力を頼みたいそうよ。どうする？』

これはボクの計画を発動させるチャンスじゃないか……ふふ、

楽しくなって来たよ。

「条件飲んだらいいって言っておいて」

『了解。じゃあ、データは明日か明後日にでもアーガスに持って来て……秘書が五月蝿いから、そろそろ切るわね。後、夜更かしとエッチは程々に……でも、孫は早めによろしくね♪』

「「……」」

最後に爆弾発言を残して言った義母さんのせいで、気まずい雰囲気になっちゃったや。

「お兄ちゃん……」

顔を真っ赤にして照れている詩乃は可愛いと思う。

「エッチする？」

「ぶっ！」

詩乃からも投下された爆弾発言に、ドキドキが泊まらないよ。

「私はお兄ちゃんになら、いいよ？　そうじゃなきゃ、一緒に寝たり、お風呂に入ったりしないから……むしろ、ウェルカム？」

そんな事を言いながら、迫って来る詩乃にボクの理性は……

「するか」……アッサリと敗北しました。

やりたいざかりの中学生には耐えれません。

だから、詩乃をお姫様抱っこして、ベットに連れていきました。

次の日、学校帰りの制服のままアーガスの研究室へと向かいました。
ちなみに、昨日は詩乃の身体を開発するだけで終わったよ。
決してヘタレじゃ無いんだから！
詩乃の身体の事を考えたら仕方ないんだよ。

「はい、お兄ちゃん。入館証」

「ありがとう、詩乃」

詩乃が受け取って来てくれた入館証を持って、何個もの厳重なゲートを潜って研究室に着いたら、２０代の男性が迎え入れてくれた。

「君が社長の言っていた開発者かい？」

「そうです」

「私は茅場晶彦、ソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）の開発を担当している」

「ボクは朝田錬、こっちは妹の詩乃」

詩乃は会釈だけして、直ぐにボクの後ろに控える。
ボクの秘書みたいな感じだね。

「わざわざご足労頂いて、すまないね」

「いえ、ついでなのでお気になさらないでください。それに、協力

は条件次第ですから」
「分かった。それで、条件はなんだい？」
「まず1個目は、ボク達をＳＡＯのβテストと本サービスに参加させて欲しい」
「……いいだろう」
茅場晶彦はしばらく考えた後、許可をくれた。
「2個目は、武器に銃と弓、蛇剣を追加してくれ」
「おい……」
「出来れば、狙撃銃がベストかな。3個目はサポートＡＩやテイマー系を弄らせて」
「……銃や弓を入れるのは、ＳＡＯでは無くなるから却下だ」
「いや、銃剣とか弓の外側を刃にすればいいんじゃないかな？」
ボクの狙いは、詩乃に狙撃銃を装備させる事だよ。
だって、シノンって言ったらヘカート？でしょう？
異議は認めない。
「後、最後にオリジナルソードスキルシステムかな」
「ふむ……」

「用件を飲んでくれるなら、資金援助の追加と技術提供は問題無いよ」

「解った。条件を飲む代わりに、その作業はそちらでやってくれ。後は……バランスについては難しくするぞ」

「銃の入手難度とかだね」

「ああ。銃弾も一発１００コルから５００コル辺りだな」

「凄くお金いるね……」

「まぁ、それぐらいじゃないとな」

確かに、反則だからね。

「お兄ちゃん、学校にはしばらく休むって連絡しといたよ」

「ありがとう」

それから、ボク達は三人で色々話して、内容を纏める。

「じゃあ、こっちが技術提供するのは、サーバーやコンピュータでいいよね？」

「ああ。しかし、本当にこのスペックは出せるのか？」

「もちろんだよ。五感全てを実装しても、一切重くならない粒子コンピュータを発電機セットで提供するよ」

「では、細部まで徹底的に行う」

「うん。それじゃ、新たな世界を作ろうか」

「うむ」

「何か悪役みたいだよ、２人とも……」

義母さんの所に行っていた、詩乃が帰ってきて、きつい一言を頂きました。

その後、ボク達はソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）を改良していった。

ソードアート・オンライン（Sword Art Online）？（前書き）

一部変更しました。

ソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）？

月日が流れて、改造したソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）が正式にオープンβになったのでボク達も参加した。
ちなみに、多数の銃や様々な種類の武器を実装したし、装備の成長システムも突っ込んだ。
装備の成長システムは簡単で、一定経験値が貯まる⇒精錬する⇒一定確率で成功⇒装備が成長するという、遊び仕様だよ。

「オープンβも問題無く終了したな」

そう、参加したと過去形なんだよね。

「しかし、君の母親は辞任したがいいのかね？」

「無問題（モーマンタイ）だよ。これから晶彦がやろうとしている事を知っているからね。
ちなみに、死亡に関してはやめた。やっぱり、生死をかけたほうがいい」

「そうだな。そちらの方が世界として間違っていない。しかし、おまえ達も参加するなら死ぬぞ？」

「死なないように僕達のナーヴギアを改良したから平気だ。まぁ、上手いってるかは、わかんないけどね」

施した内容が原作で茅場晶彦が行った事と一緒だからね。

「ならば良い。それでは、明日……アインクラッドで会おう」

「了解」

ソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）をログアウトしたボクは、義母さんに書き置きと新薬やＯＳなどのデータを作ってからお風呂に詩乃と共に入った。
当然、洗いっこしたよ。

次の日の３時調度に、詩乃と手を握りながらデスゲームにログインした。

「キャラクターネームはｒｅｎ、生別は男……少しの間だけだから、厳つくしておこう……いな、ランダムだ！」

容姿を設定した後、普通は装備の選択に入る。
原作とは違い、武器を最初に選べるんだよ。
だが、ボクはランダムを選択したのでそのままだ。

さて、《はしまりの街》に入ったボクは、ステータスを開いて装備を確認する。

ＮＡＭＥ：ｒｅｎ
ＬＥＶＥＬ：１
筋力：１
敏捷：１

装備
スモールソード
白い麻のシャツ
白い麻のズボン
灰色の厚布ベスト
灰色の厚布シューズ

「片手剣か～」

装備は問題無いね。
問題は、容姿だよ！
自分の容姿のまま女性になってるんですけど？
あれ、特に問題……ちゃんと男だから、問題無いや。

「さて、待ち合わせ場所に行くか～～」

復習をしておこうかな。
このゲームは、ソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）略称はＳＡＯ。
真の仮想世界を構築するナーヴギアの性能を生かした世界初のＶＲＭＭＯＲＰＧ　（仮想大規模オンラインロールプレイングゲーム）。ユーザーの期待と渇望をうけ、初期出荷分１万本は瞬時に完売した。自らの体を動かし戦う、というナーヴギアのシステムを最大限体感させるため、魔法の要素を排し、代わりにソードスキルという必殺技と、これを使うための様々な武器類が数多く設定されている。また鍛冶や裁縫、釣りや料理、音楽など戦闘用以外のスキルも多数用意され、ゲーム内で生活することができる。
ゲームの舞台は石と鉄で構成され、全百層からなる巨大な浮遊城アインクラッド。内部には都市や村、森や湖などが存在する。上下の

フロアをつなぐ階段は各層一つのみ、その全てが怪物のうろつくダンジョンに存在し、階段の直前には強力なボスモンスターが立ちはだかっている。
通貨単位は《コル》となっている。
ゲームの開始位置はここ、はじまりの街だよ。

「お兄ちゃん、こっち！」

声を掛けて来たのは、明るい水色の髪をした美少女。

「待たせちゃった？」

「ううん、今調度ここに転送されたんだ」

そう言いながら、支給された初期武器の火縄銃を確認する詩乃……いや、シノンだね。

「武器は問題無い？」

「うん」

「なら、弾丸と回復アイテム買って《ホルンカ》の村に行こう」

「ＯＫ。でも、初期所持金じゃ銃弾は余り買えないけどいいの？」

「ボクのお金も合わせるから、問題無いよ」

初期コルは１２００で、弾丸は一発１００コルだから１２発しか買えない。
まぁ、２４発２０００コルで売ってるけどね。

「すいません、ちょっといいですか？」

現れたのは深紅の瞳と金色の髪をツインテールにした大人の女性。

「何？」

無表情でクールに対応するシノンに、ちょっと怖がりながらも、聞いてくる女性。

「ゲーム初めてなので、出来たらパーティ組んで教えて欲しいなって……」

女性にカーソルを合わせてみると、表示されたのはｓｉｒｉｋａの文字……原作キャラか。

「嫌」

「そうですか……」

「いいよ」

「「え？」」

シリカちゃんを見捨てる？

そんな事が出来る訳が無い。

「お兄ちゃん？」

「ただし、スパルタだから。それでいいなら一緒に行こう」

「よろしくお願いします！」

「まぁ、お兄ちゃんがいいなら別にいいかな」

シノンも納得したので、銃弾とシリカの防具を購入して、残りのお金をポーションと毒消しに全て使った。

シリカを加えたボク達は、はじまりの街の北西ゲートから出て、草原をひたすら走って突っ切る。《フレンジーボア》というイノシシが出現する。

それに、ボクが、ただの抜き撃ちソードスキル《スラント》で一撃いれてからシリカを前に出す。

「あっ、あの……怖いですっ！」

「ダガーを構えて、スラントって言いながら、ダガーを抜いたらソードスキルが発動する」

「す、スラント！」

シリカがシノンに無視されつつも、シノンの助言通りにやるが、ただがむしゃらにやってるだけなので、録に発動しないし、被弾も増えている。

「はい、時間切れ」

ボクはイノシシの目にスモールソードを斜めに突き刺し、脳を破

壊する。
　このゲームは弱点が色々設定されているから、知っていれば簡単だ。

「あぅ……」

「シリカは、しばらくモーションの練習と見学だね」

「はい……すいません……」

「ほら、行くよ」

　シノンがシリカを引っ張って先に行った。

　それから、何度かシリカの練習をやりながらホルンカの村に着いた。

「クエスト行くよ」

「「はい（うん）」」

　ホルンカ村の奥にある民間に入ると、台所で鍋をかき回していた、いかにも《村のおかみさん》といった感じのＮＰＣ（ノンプレイヤーキャラクター）がこちらを見て言った。

「こんばんは、旅の剣士さん達。お疲れでしょうから、食事を差し上げたいけれど、今は剣何も無いの。出せるのは、一杯のお水くらいのものよ」

「「「それでいいです」」」

システムが認識出来るように、ハッキリと三人で発音した。

「どうぞ」

「「「ありがとうございます」」」

水を飲みながら、シリカにレクチャーしていると、隣の部屋から小さな子供が咳込んでる声が聞こえると、おかみさんが肩を落とし、数秒するとクエストの証である金色のクエスチョンマークが出現した。

「これがクエストの合図なんですね」

「うん」

「何かお困り事でもあるんですか？」

定番のセリフを言うと、おかみさんは身振り手振りで伝えてくる。内容は簡単で、娘を助ける為に滅多に出ない植物モンスターからはいしゅというをアイテムを取って来てくれという内容だ。その代わり、報酬として《アニールブレード》という、初期にしては強力な剣をくれる。

「「「任せてください！」」」

クエストを受けると《？》が、進行中を現す《！》になったので、ボク達は外に出て、村の奥へと行き、村で1番大きな家に入る。

そこには、いかにも村長ですという御老人がいて、お茶を飲んでいる。

「「こんばんは」」

「おや、旅人さんか……どうじゃ、わしの話を聞いていかんかね？」

椅子を進められたので、座って話を進める。

「「「聞かせてください」」」

クエストが始まり、御老人が喋りだしたら、シノンが椅子に座ったまま瞑想しだす。

「あの、聞かないんですか？」

「シリカ、時間が勿体ないんだよ。だから、修業するよ」

「はい……？」

理解していないシリカを放置して、進める。

「まず、ステータスからスキルスロットを選んで、体術のスキルと短剣のスキルを習得して」

「分かりました」

理解して無くても、大人しく従って短剣と体術のスキルを覚えたシリカを確認したら、立ち上がらせて殴りつける。

「きゃっ！　何をするんですか！？」

「修業。ちなみに、村の中はシステム保護があるから平気だよ。ボクの攻撃に中ら無いように避けて反撃するように……もちろん、短剣装備してソードスキルは有りだよ」

「やっつみます」

シリカは素直に従ってくれるから楽だね。

「やっ！たぁっ！」

シリカの攻撃を左右に避けたり、流して防いだりしながら攻撃する。

「ほら、身体全体を使って戦うんだよ。これはゲームであってゲームじゃない。基本的に現実の身体を使ってると思うほうがいいよ」

「はい！　なら、身体全体を使って……」

身体をバネの様に使いだしたシリカは、かなりの速度の乗った攻撃をしてくるようになった。

３０分後、ようやく御老人の話は終わった。

「そうじゃ、御主達旅人に頼みたい事があったんじゃ」

「なんですか？」

「私達でよければ、お手伝いしますよ」

「ありがたいのう」

クエストマーク《？》が出現した。

出現条件は、３０分間、御老人の無駄話に付き合う事。

「お願いしたい事は、村の近くに出現する《リトルネペント》３０体か《ラージネペント》３０体を狩って来てほしいのじゃ。こやつらが出現してから、狩りも大変で困っておるのじゃ」

「「「分かりました」」」

三人で返事をしてクエストを受けた後、村長の家を出た時にシリカが発した言葉はひとつ。

「長かったですね」

「「ああ（うん）」」

心の底からボク達の思いは一緒だった。

Ｓｉｄｅ　シノン

村長から依頼を請けた私達は、村の門から出て深い森の中に入っていく。

「怖いですね……」

「不気味」

「まぁ、気にしちゃダメだよ。あと、シリカにもここからは参加してもらうからね」

シリカはホルンカ村に着くまでの間……草原を超えてから一切戦闘をさせていない。

「分かりました」

理由は簡単で、即死する敵が出るからだ。

森に入ってしばらく進むと、私の索敵スキルに敵の反応が出た。

モンスターネームの色は赤だけど、色合いはほんの少し濃く、レッドじゃなくマゼンタといったところ。
このネームの色は、敵の相対的な強さを大まかに計る事が出来る。どう足掻いても勝てない程のレベル差があるモンスターのカーソルは血よりも濃いダーククリムゾン。
対して、何匹狩ってもろくに経験値が稼げない雑魚モンスターはほとんど白に近いペールピンク。
同じレベル帯の敵はピュアレッドで表示される。

「それじゃ、雑魚はお願い」

「はい」「任せて」

二人の返事を聞いた私は、木の幹などを足場に登って行く。
木の上に着いたら、高い木を目指して飛び移り、辺り一帯を見渡せる場所に行く。

「ポジションはここでいい。後はおびき寄せて探すだけ」

私は枝の上に立ち、眼下に居るリトルネペントに実体化させた火縄銃を向ける。

「高低差、風力、重力共に問題無し」

銃口を微調整しながら、1メートル半もあって、ウツボカズラを思わせる胴体の下部で、移動用の根が無数にうごめいている。
左右には、鋭い葉を備えたツルがうねり、頭にあたる部分では捕食用の《口》が粘液を垂らしながら物欲しそうに開閉している。
私はその中でも、花つきと呼ばれる物を狙う。

「……」

精神を集中させて、βテストと日頃ので培った技術を最大限に活かしてブレを無くし、引き金を引く。

すると、火縄が火薬に中って爆発を起こし、銃弾が勢い良く飛んで行く。

飛んで行った弾丸は、花つきリトルネペントの弱点である茎の付け根に中たり、一撃でポリゴンとなって消滅した。

「気持ち悪いから、さっさと狩ろう」

新たな弾丸を銃口から入れて、備え付けの棒で奥に押し込み、銃弾とセットで販売されている火薬を火縄の下の部分に入れる。

「はいしゅはドロップしたから、問題無い……でも、後二個は最低でも必要……なら……」

私が次に目を付けたのは、実つきと呼ばれるリトルネペント。こいつは、花つきと違って罠（トラップ）として配置されているモンスター。この実つきの特徴は、実を攻撃すると巨大な音と共に破裂し、嫌な臭いのする煙を吐きだして、仲間を呼び寄せる。

「命中」

その実つきの実に、木の枝を投げて破裂させる。

「相変わらず嫌な臭い……」

臭いに誘われて、沢山のリトルネペントがマップ中から集まって来る。

私はその中から花つきだけを狙撃してはいしゅを集めて行く。
その外側で、お兄ちゃんとシリカがリトルネペントを少しずつ呼び寄せながら、殲滅していく。

「花つきが沸くまで、援護していようかな……」

私を狙って下に集まったリトルネペントは一生懸命、私がいる場所を攻撃しようとするけど、距離が届かないので無駄な事をし続けている。
だから、私は拾っておいた石や枝を投擲して二人の援護を行う。

お兄ちゃんは全然問題無い……むしろ、２０秒とかからずリトルネペントの茎が切り払われて、止めを刺されていく。
下から切り上げた後、瞬時に上から下に切り下げ、身体を捻って下から斜め上に切り上げて、回転して斜め反対側から斜め下へと切り下げたあと、腕を戻して止めの突きをリトルネペントに叩き込みました。

「確実にＯＳＳ（オリジナルソードスキル）として登録できますね」

爆散したリトルネペントの残骸を見ているとそう思います。
スキル認識されていないので、ディレイすら発生しない強力無比。

「シリカの方は……苦戦していますね」

１対１で２、３回被弾してようやく一体倒せるくらい。

「つまり、ポーション１本でリトルネペント１体……効率悪すぎ」

私は、尖った木の枝や石をリトルネペントに投げ付けた。

ソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）？　シリカ

Ｓｉｄｅ　シリカ

私は綾野珪子、ソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）の中ではシリカです。
生まれて初めてのＶＲＭＭＯＲＰＧにこのゲームを選びました。理由は簡単で、お父さんが狩って来たのを興味本位でプレーしてみたのです。
ログインした私は、自分の理想の姿をイメージを元にしてキャラクターを作り、ＳＡＯの世界に降り立ちました。
最初に驚いたのは、草木の匂いや人の息遣いが実際に感じる事でした。

「すごいです～」

「ねぇ、君１人？　よかったら俺達が教えてあげるよ？」

私に声を掛けたのはカッコイイ格好をした人達でしたが、何か嫌な感じがしました。

「結構です……」

「そういうなよ。初心者なんだろう？　俺達が優しく教えてあげるからよ！」

また、嫌な予感がしたので後ろにジャンプしました。
どうやら、腕を捕まれそうになったみたいです。

「っ！？」

「待ちやがれっ！？」

「待ち合わせしているので嫌です！」

男の人達の隙を付いて、脇を抜け、全力で走って逃げ出しました。

それから、追われてる間に水色の髪の女の子と黒い髪の女の子を見付けました。

「はぁ、はぁ……」

さっきみたいに嫌な感覚じゃなく、予感みたいなのを感じて二人に話かけました。
結果的に、βプレイヤーの人達だったみたいで良かったと思いました……この時は、ですけど。

それから、3人でPT（パーティ）を組み、教えて貰いながら進んで行き、ホルンカ村の村長の家で訓練をして、村の外に広がる深い森へと入っていきました。

それから、シノンさんが木に登って行って、私とレンさんだけになりました。

「シノンが行動を起こすまでボク達も、木の上に避難しておくよ」

「わっ！」

次の瞬間、私はレンさんに抱き抱えられて木の上にいました。

レン君の顔を近くで見ると、やっぱり整ってて凄く綺麗……

さすが、ゲームです。

「始まったね」

「嫌な臭いです」

銃声が2回響くと、嫌な臭いがそこら中に充満し、シノンさんが居る所に敵が沢山集まって来ました。

「じゃあ、ボクが引き寄せるから、頑張ってね」

「はい！」

私達は木から降りて、密集地帯から距離を取って、戦闘準備をします。

「準備ＯＫ？」

「はい、行けます」

ポーションなどの確認も終わっているので、問題はありません。

「まずは、1体……」

レンさんが尖った枝をリトルネペントの付け根に投擲し、見事命中させました。

リトルネペントの1体がこちらに気付いて、這い寄って来ました。

「じゃあ、シリカ……頑張ってね♪」

「はっ、はい！」

私は、目の前に来たリトルネペントに近づいて、短剣のソードスキル《カット》を発動して攻撃しました。

カットは素早く一閃するだけの簡単で汎用性のあるスキルです。

私が戦闘を始めると、レンさんも直ぐに周りの敵と戦いだしました。

「っ！」

ツルの振り下ろし攻撃を半歩下がって避けて、ツルを攻撃しながら近づいて肉薄します。

これで、ツルの攻撃は、その威力を充分に発揮出来ない状況になりました。

具体的には、即死攻撃が多少なりとも耐えれるようになるくらいです。

「痛いけど我慢っ！」

風切り音と共に高速で迫って来るツルを体術で避けた……所にもう1本のツルが迫って来て、私の左肩に直撃しちゃいました。

「ＨＰが３割も減っちゃった！？」

ＨＰが大幅に減った事に気を取られたせいで、私はツルの１撃をくらい、吹き飛ばされて、木に頭から激突して身体が一瞬動かなくなりました。

「はい、そこでストップだ」

私に迫っていたツルをレンさんは、木の枝で地面に縫い付けて、相手の行動を封じちゃいました。

「今の間にポーション飲んで」

「はい！」

ベルトポーチからポーションを取り出して、飲んでみると昔に販売されたリアルポーションと同じ味がしました。

「体術だけじゃなく、短剣も防御手段になるって事を忘れないでね」

「分かりました！」

アドバイスを貰ったので、再度モンスターに挑戦です。

「行きます……」

リトルネペントに向かって走り出すと、向こうも力ずくで拘束を解いて振り下ろして来ます。

「（右から嫌な感じがします）」
ツルの攻撃は、右側から迫って来たので半歩移動して、ツルに短剣を合わせて、相手の力を利用して付け根まで切り裂き、ディレイが終了した《カット》で、文字通り切ってあげると、ポリゴンとなって消滅しました。

「次、お願いします」

「あいよ」

それから、私は予感のような感覚がした時は無傷で倒し、しない時はなんとか倒せる感じになりました。

『シリカ、援護する』

「お願いします」

メッセージが表示された小窓を確認して、直ぐに援護を依頼しました。

『任せて』

シノンさんは驚異的な狙撃能力で、私が回避出来ない攻撃に対してピンポイントで投擲を行って、ツルの軌道を変えてくれました。

「やぁっ！」

リトルネペントの茎の根っこを執拗に攻撃続け、どんどん倒して行きます。

『花つきが出た。少し援護出来ない』

「分かりました」

援護が無くなった私は、背後から迫って来たツルの刺突を少し横に移動して、短剣をツルに突き刺しました。
ツルはそのまま突き進むので、自身の力によって大きなダメージを負ったようです。

「シリカ、気をつけろ！」

「え？　きやっ！？」

私の直ぐ横にリトルネペントがＰＯＰ……出現して、攻撃を仕掛けて来ます。

「わわっ！」

右、左、右、前、前、左、後ろと４本のツルを勘に従ってステップを踏む様に避けたり、弾いたりてして生き残こる事に必死になりました。
こんな気持ち悪い生物に食べられるなんて、絶対に嫌ですから！

「お～～いけるじゃん。なら、そのまま頑張ってね」

「が、がんばります」

それから、少しして私は普通にパターンを覚えたのか、３体くらいなら同時に相手が出来るようになりました。

『４：２３分か……シノン、纏めて殺して』

『了解、逃げておいて』

「シリカ、木の上に避難だ」

「分かりました」

また木の上に避難すると、今度は強烈な臭いがして来ました。
どうやら、沢山の実を同時に破壊したようです。

「シリカ、今の間にステータス振っといて」

「えっと、敏捷がいいですか？」

「シリカの戦い方ならそうだね」

「じゃあ、敏捷に振り回す」

スモールダガーを腰の鞘に戻して、各種ウィンドウを開く仕草を
失敗しながらも行ってステータスを表示しました。

ＮＡＭＥ：ｓｉｒｉｋａ
ＬＥＶＥＬ：２
筋力：１
敏捷：１

私はいつの間にか２レベルに上がっていて、ステータスポイント

を2点手に入れていました。

「それじゃ、上げ……」

ステータスを上げようとした瞬間、シノンさんが居た木のしたの方で、爆弾が爆発したような轟音と火薬の臭いがしてきました。

「さすが、火薬と弾丸……２０００コルはだてじゃないや」

「シノンの下に居たリトルネペントは全滅に近いな」

大量のリトルネペントが群がっていた地面は、黒く焼け焦げていて、多少のリトルネペントを除いて全滅なのは確定です。

「シノンさん、大丈夫ですか！？」

『爆発させたのはジャンプしながらだから、平気。それにしても、簡易手榴弾は強い』

「まぁ、残敵掃討開始」

全てのリトルネペントを処理して、ホルンカ村に帰った時には、３レベルとなっていました。

ＮＡＭＥ：ｓｉｒｉｋａ
ＬＥＶＥＬ：３
筋力：２
敏捷：４

「報酬を受け取ろう」

はいしゅをおぼさんに渡して、アニールブレードを3本頂きました。

村長からは、《アニールダガー》を3本頂きました。

アニールブレードは2本は販売して、シノンさんの弾代となって消えました。

どうやら、村長のクエストはどちらかでも問題無いようです。

アニールブレードをはいしゅと交換し、アニールダガーをリトルネペント３０体討伐報酬として手に入れた。
手に入れたアニールブレードは、必要筋力５の片手剣で攻撃力５０、売値２５０００。アニールダガーは、必要筋力３の短剣で攻撃力４０、売値２５０００。
スモールソードやスモールダガーが攻撃力５や１０なので、下層階じゃ、かなり強力な武器だ。

「……アニールブレード2本とアニールダガー1本は売ったから７５０００コル手に入ったよ」

「それで、装備揃えますか？」

「それがいいと思う。弾薬も弾丸ももう無い」

設定しといてなんだけど、銃の弱点はやっぱり弾丸などの値段だね。

「そうだ……ね……」

「何これ？」

「光ってます！」

ボク達は青い光に包まれて、強制的に転送された。

転送された先には、同じ様な人達が沢山いるうえに、次々と追加で転送されて来た。

「これはいったい……」

「あれ、ＧＭだね」

場所ははじまりの街。そこに現れた身長２０メートルはあろうかという、真紅のフード付きローブをまとった巨大な人の姿だった。
そして、そのフードの中身は完全に空洞だった。
そう、現れたのはゲームマスター茅場晶彦だった。

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

さぁ、本格的にソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）の始まりの幕が上がる。

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールこのできる２人のうちの１人だ』

「もう一人はお兄ちゃんだよね？」

「だろうね」

まぁ、コントロールはほとんど出来ないけどね。

『プレイヤー諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気付いていると思う。しかし、これはゲームの不具合ではない。繰り返す。これは不具合ではなく、《ソードアート・オンライン》本来の仕様である』

「し……、仕様？」

シリカが信じられないといった表情で呆然としている。

『諸君は今後、この城の頂を極めるまで、あるアイテムを除いてゲームから自発的ログアウトする事ができない』

「茅場さん、やってくれるね」

シノンはちょと不安みたいだな。やっぱり、母親が心配なんだろう。

『……また、外部の人間による、ナーヴギアの停止あるいは解除も有り得ない。もしそれが試みられた場合――――ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

「そんな……」

「……」

『より具体的には、１０分巻の外部電源切断、２時間のネットワーク回線切断、ナーヴギア本体のロック解除、または分解の試み――――以上のいずれかの条件によって脳破壊シークエンスが実行される。この条件は、すでに外部世界の当局およびマスコミを通して告知さ

れている。ちなみに現時点で、プレイヤーの家族友人等が警告を無視してナーヴギアの強制除装を試みた例が少なからずあり、その結果――残念ながら、すでに２１３名のプレイヤーがアインクラッド及び現実世界から永久退場している』

「いや……」

「お兄ちゃん……」

ボクは二人を抱き寄せて、必死に二人を落ち着かせる。その間も話は続き、ついに《手鏡》がアイテムストレージに出現して、勝手に使用された。

「シリカ？」

シリカの姿が大人の姿から、子供の姿……ゲーム通りの姿になった。

「ど、どうなってるんですか！？」

ボクとシノンの容姿はそのまま姿で、一切変化は……無い……いや、あった。長い黒髪がツインテールになっていて、まさに美少女になっていた。

「やっぱり、お兄ちゃんはその格好似合ってるよ」

いつの間にか、装備の画像データがブラックロック★シューターの姿となっていた。

「計画通り」

「シノンっ！？　お前の仕業かっ！？」
「茅場さんに頼んだ♪」
「このっ！？」
抱きしめているシノンを強く抱きしめてやる。
「くっ、苦しいです！」
「あっ、ごめ……「凄く似合っていて、完璧な美少女ですよ」お前等っ！？」
しばらく折檻を続けた後、ボク達は酒場でご飯を食べながら相談する。
「これからどうしましょう……」
「私はお兄ちゃんに任せる」
「なら、ボクとシノンは攻略に参加するけどシリカはどうする？」
「それは……」
「ボク達と来るなら、ボクが守ってあげるし守る力もあげるよ」
「どうしてそこまでしてくれるんですか？」
「それはシリカが好きだから！」

「っ！」「……」

シリカは全身を真っ赤に染めて、シノンは絶対零度の視線で見詰めて来た。

「違った、気にいったからだ」

「意味変わって無いからね。まぁ、後でＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしよ♪」

シノンの満面の笑みに恐怖を覚えたのは初めてだ。

「えっと……」

「私は別にいいから、シリカの好きにして」

「なら……お世話になっていいですか？　やっぱり１人だと不安なので……」

照れながら

「いいよ」

「うん、問題無い」

「ありがとうです。これからよろしくお願いします」

それから、フレンド登録を行いお互いの位置情報が判るようにしておいた。

「じゃあ、今日中にホルンカ村に戻ってレベル上げだね」

「その前に買い物かな？」

「うん。買い物に行こう」

ボク達は、はじまりの街にあるＮＰＣが運営している商店に付きました。ここは値段は高いけどいろいろ癖があってヤバイ物を置いているお店だよ。

「いらっしゃっいと、いいてぇが、ここはお前達のような低レベルの連中が来るとこじゃねぇ……帰んな」

ここは酒場のような所で、厳つい連中がたむろしており、バーテンダーの格好をした店主がそんな事を言ってきた。

「大丈夫なんですか？」

「平気、平気。マスター、ポーリシュ・ピュア・スピリッツとエストニアをお願い」

「……アルコール度数９６％と９８％だ。この書類にサインしな」

「了解♪」

書類にサインすると、ボク達は奥へと通され、さらに隠し通路を

通って地下へと連れていかれちゃった。

「好きな物を選べ」

通された場所は広い部屋で、壁や棚には多数の装備が置かれている。

「筋力強化系の装備や薬は？」

「そこの棚だ」

教えられた棚に向かい、装備を見る。ここのアイテムは全て現品限りのあらゆる意味での特価品。
場所を見つけるだけでも、１週間続くクエストを受けないと判明しない。逆にβプレイヤーなら知っている奴もいる。

「あるある」

装備で筋力値を底上げする装備……あがる値は１～５０までピンからキリまである。
当然、値段は最低でも１００ｋ（１０万）以上する。

「買えませんよ？」

「こっちこっち」

シリカの質問にシノンが答えを定時するみたいだ。だから、シリカをともなってシノンの居る場所にむかった。

シノンが居たのは、レジのカウンターだ。
「はい、シリカ……引いてみて」
「これはくじ引きですか？」
「そう……1回1万コルの高額クジだけど……」
そう、とても高価なハイリスクハイリターンのクジ引きだ。
「それじゃ、引かせてもらいます」
シリカが箱の中に手を入れてクジを選び出した。
「これは変な感じ……こっちは嫌な感じでダメ……これはいい感じがする……あっ、こちも……」
「もういい？」
「はい！」
最終的にシリカが箱から出したのは7つで、そのうちの1つを購入した。
「じゃあ、開けますね……」
ボクとシノンが喉を鳴らした瞬間、シリカがクジを剥がして中身を見ずにマスターに渡した。
「少し待ってな」

マスターはレジの奥にある倉庫へと消えて行った。

「何が来るか楽しみよね」

「シリカはボク達の期待に応えてくれるかな？」

「お願いですから、プレッシャーを掛けないでください！」

「あっ、お兄ちゃんにこれ似合いそう」

「そうですね、これと合わせるといいんじゃないですか？」

二人が選んで来たのは奉仕を行う人達が着る制服。黒と白で彩られた制服。

「なんでメイド服なんだよ！」

「「似合うから」」

そう、執事服じゃなくてメイド服。

女装好きの借金執事が着る方じゃなくて、超が付く程の天才が着ている方だ。

「イ、ヤ、ダ！　ボクは絶対に着ないぞ！」

「なら、こっち」

「いや、こっちの方がいいと思います」

次々と店の中から持って来られる“女性用”の服や装備立ち……

……それを無理矢理合わせられて大変だった。

「速く帰って来てくれ～～！？」

結局、いろんな服を合わせられて大変だった。なんで女の子ってこんなのが好きなんだ？

「待たせたな」

「全くだ……」

「邪魔するのも悪いし……「おい」これが景品だ」

マスターが持って来たのは、１５００ミリメートルもある細長い大きな箱だった。

「こいつがお嬢ちゃんが引いたＡランクの景品……種別　セミオートマチックライフル、口径７．６２ｍｍ、銃身長６２０ｍｍ、ライフリングは４条右回り、使用弾薬７．６２ｍｍ×５４Ｒ、装弾数１０発（箱型弾倉）、作動方式ガス圧利用方式、全長１２２５ｍｍ、重量　４３１０ｇ、銃口初速８３０ｍ／秒、有効射程６００ｍ……」

「「ドラグノフだと（ですって）！？」」

「本来は１０Ｍ（１千万）コル必要な代物だ。よかったな、当たりだぜ」

「えっと……わっ、思いです！」

渡されたドラグノフによろけたシリカを二人で支えて、改めてシノンを見る。

「貰っていい？」

「「どうぞどうぞ」」

「重いね……必要筋力２００、攻撃力１０００……」

「あははは……使えね」

でも、シノンっていえばヘカート？なんだけど、狙撃銃のドラグノフは充分当たりだよね。

「……大丈夫、まだお金はある……」

「あっ、それは……」

「何？」

無造作にクジ箱に突っ込んで取ったクジを開けようとしたら、シリカが止めた。

「ただ、嫌な感じがするので……」

「（どう思う？）」

「（シリカは予感ってか、予知に近い感覚を持ってるみたいだね。普通は背後の死角から放たれた攻撃は避けれないよ）」

「（なら、試す）分かった。なら、シリカはどれがいい感じだと思う？」

「私は……これですね……」

シリカは、先程避けていたクジの中から１つ選んで、シノンに差し出した。

「じゃあ、これでお願い」

「１万コルだ」

「はい」

支払いを終えて、開けたクジは先程のドラグノフと同じランクを示すＡと品物を表す数字……シリカって、キュピーンってなる奴に覚醒してないか？

「お兄ちゃん！」

「うん。シリカ、ここにある残りの５個はいい感じがするんだよな？」

「うん、そう感じるよ？」

「「マスター、この５個も頂く！」」

シノンと声が揃ったけど、アニールダガーとアニールブレードを売った代金が残り５０００コルになろうと購入した。

当たると解っているクジを買わない奴はいないよね。

ボクの叡智から引っ張り出した必勝法でも、Ａなんて引けないんだからね。

「万能の指輪、火王の盾、金色の槌、ドラゴンスレイヤー（大剣）、剛竜の指輪、魔狼の首輪だな」

「どれも変なのばっかり……」

「うん、万能の指輪が装備制限無視、剛竜の指輪が筋力値１００上昇、魔狼の首輪が敏捷値１５０上昇……後は強力なだけかな」

「なら、売って金に変えて装備を整えよう」

「「賛成（ です ）」」

盾と剣、槌を売るだけで莫大なコルが手に入ったので、能力値永久上昇の薬と経験値増加アクセサリーとアクセサリー１式を購入する事にした。

シリカが魔狼の首輪増加装備。

シノンがドラグノフと万能の指輪を装備。

ボクが、剛竜の指輪を装備。

後は武器と防具をどうにかしないとね。

ソードアート・オンライン（Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ）？（後書き）

装備がチートになりました。基本的に使わないだろうけど。

ドラグノフとか、一発の弾丸が１０００コルとかするでしょうしね。

ソードアート・オンライン（Sword Art Online）？（前書き）

？話と前話を少し弄りました。

ボク達は更に装備を整えた。

ＮＡＭＥ：ｓｉｒｉｋａ
ＬＥＶＥＬ：３
筋力：２（＋５０）
敏捷：４（＋１５０）
アニールダガー２本（攻４０）
金剛の腕輪（筋力＋５０）
魔狼の首輪（敏捷＋１５０）
深紅猫の装備セット（防７０、体術補正）
聖なる髪飾り（全バットステータス耐性）

シリカの姿は、原作通りで可愛らしい。

ＮＡＭＥ：ｓｉｎｏｎ
ＬＥＶＥＬ：３
筋力：５（＋５０）
敏捷：１
ドラグノフ（攻１０００、索敵補正、視野拡張）
火縄銃（攻２０）
投擲用ナイフ３０本（攻１０）
狙撃手セット（防９０、移動速度上昇、隠蔽率上昇）
金剛の腕輪（筋力＋５０）
万能の指輪（装備制限無視でドラグノフ装備）

聖なる髪飾り（全バットステータス耐性）
シノンもガンゲイルオンラインと同じ服装だ。
二人の格好はボクが趣味に走った結果だよ。

ＮＡＭＥ：ｒｅｎ
ＬＥＶＥＬ：３
筋力：３（＋１００）
敏捷：３（＋５０）
アニールブレード（攻５０）
ロックキャノン（攻６０）
ブースターステラセット（防１２０、視野拡張、速度上昇、攻撃力上昇、特殊攻撃耐性）
聖なる髪飾り（全バットステータス耐性）

ボクのは２人に着せられたブラックロック★シューターのセットだ。
詩乃が茅場晶彦に頼んでいたみたいだよ……やられた。
ボクは２人に髪飾りプレゼントしたりしたけどね。

「買い物で随分遅くなった」

シノンの言葉通り、日は沈み、月が輝きを放ち、はじまりの街を優しく照らしている。
月光によってか分からないが、嘆き叫んでいた声も止んでいる。

「全くだね」

「でも、いいアイテムが沢山手に入りましたね」

シリカの言う通り、能力値上昇の薬や回復アイテムなどの必要そうなアイテムは手に入れたので、３０層くらいまでは楽勝かな。

「でも、熟練度をあげる為に手加減は必要」

「だな。ボクはネタ武器も使うしね」

「聞いた限り、バトルヒーリングは必須技能ですしね」

相談しながら宿に進み、部屋を何部屋取るか相談する。

「どうする？」

「私はいつも通り、お兄ちゃんと一緒でいい」

「私も1人になりたく無いです……」

「なら、2人部屋を借りようか」

「「うん（はい）」」

2人部屋とお湯にタオルを頼んで部屋へと向かった。

宿に取った部屋はシステム的に安全なので、特に問題は無い。

「んっ」

部屋き入るとシノンが装備を解除して、ラフというか下着姿になった。

「シノンさん？」

「汗が気持ち悪いから、身体を拭くの」

シノンは転送されていた桶に入った湯と手ぬぐいを準備した。

このゲームは原作と違い、スペックに物言わせて、五感や生理現象まで再現されている。

「そうですね、私も拭きます」

「じゃあ、シリカもいるからボクは外で待ってるね」

「え？　私は気にしませんよ？」

「ほら、洗いっこしよ」

シノンとはいつも一緒にお風呂入ってるから別にいいんだけど……まぁ、シリカ本人がいいっていうならいいや。

眼の保養にもなるしね。

それから、洗い合いを洗い始めて少したった。

「それじゃ、前を洗いますね」

「ちょっ、まっ！？」

オプションの最下層にある倫理機構とセクシャルハラスメント一部回避機構に登録した為、セクハラ警告はでないまま、天使のように可愛らしい生まれた姿のまま、シリカがタオルで隠していた下半

身に手を入れて、タオル越しとはいえ、触って来た。

「え？　何これ……これって……きゃぁあああああっ！？」

自分で何を触ったのか理解したシリカが真っ赤になって悲鳴をあげた。

「なっ、なんで……女の子なのに、こ、こんなのがついてるんですかっ！？」

「シリカ、お兄ちゃんは男性よ？」

「シノンがお兄ちゃんって、何度も言ってるじゃん」

「でっ、でもっ！？　こんな可愛くて綺麗な人が男の人なはずありませんよ！？」

やっぱり、男の人として見てなかったんだな。

「だから、プレイだと思った？」

「はい……あれ？　じゃあ、私……いま……男の人の前で、はだかをみせて……からだじゅうきれいにふいてもらった……きゅう～～」

現状を正しく理解したシリカが、恥ずかしさの余り気絶して、倒れて来たので抱きしめた。

「お兄ちゃん……」

「なっ、なにかなシノン？」

無表情＋底冷えした冷徹な視線で見詰めてくるシノンの前で、ボクは獲物のようにガタガタと震える。

「シリカをあっちのベットに運んで」

「イエス、マム！」

寝巻として買ってあったシリカの着ぐるみパジャマ（わふ～の女の子が着てる奴）を着せてベットに寝かせ、布団を掛けてあげた。

「それじゃ、んっ……続きしよ？」

「了解」

シノンがキスした後、二人でベットに入り、自主規制のような事をした。

朝、目覚めたら動けない状態になっていた。

「……んんっ……」

右側を向くと、シノンの女神のように整った綺麗な顔が間近にあり、ボクの右腕を枕にして寝ている。

「すぅ～～すぅ～～」

逆の左側を向くと、シリカの天使のように可愛らしい顔がキスできるような間近にあり、こちらもボクの左腕を枕にして寝ている。

「いつの間に潜り込んだんだろう？」

「私は気付かなかったよ。それより、おはようお兄ちゃん」

「うん、おはようシノン」

起きてきたシノンと日課であるおはようの口づけを行った。

「それじゃ、私は準備するね」

「うん」

シノンはボク達の上を通って、床に降り立ち、ステータスウィンドウから装備覧を操作して、裸から昨日購入した服に変更した。

「ボクも着替えて行うか……」

シノンが起きた事で空いた右手で、ステータスウィンドウを開いて、ボクも昨日購入した服に装備を変更した。

言い忘れてたけど、上半身だけはＹシャツに変更してある。

「……ん……こない……で……こわいよ……おか……あ……さん……」

うなされだしたシリカの頭を右手で優しく撫でてあげると、落ち着いて来た。

ボク達と違ってシリカは、普通に平和な日本で過ごしていたただの子供だ。
その子供が、今からいつ終わるかも分からない生死を掛けた戦いに乗り出さなきゃいけないんだから、その不安は相当な物だ。
そして、シリカの押し隠していた不安が夢という形で出てきたんだろうな。

「シノン、ボクはしばらくシリカを撫でてるね」

「なら、私は整備でもしてる」

シノンは反対のベットでドラグノフを説明書を見ながら解体して、整備を行いだした。
ボクはそのままシリカが起きるまで、頭を撫で続けた。

シリカが起きてからは少し大変だったよ。

「あぅあぅ／／／」

起きた瞬間、ボクの顔が間近にあって、寝顔を見られた上に頭を撫で続けられていて、テンパっていたら昨日の件も思い出して、身体中を真っ赤にして、可愛らしい姿をみせてくれている。

「落ち着いて……」

「はい……」

「シリカ、これから君はどうする？　ボク達でシリカを養ってもい

いよ？　シノンはボクについて来る気満々だから聞かないけど」

さっきの寝言を聞いたら、やっぱり改めて意思を確認したくなった。

「私も別にいいよ？　シリカのお陰でドラグノフが手に入ったしね」

「私は……行きます。迷惑かも知れないけど、１人でいるのも不安ですし、ＳＡＯ初めてできた大切な友達２人に何かあったら、私は後悔しますから……」

「分かった。シノンもそれでいい？」

「ええ。私は問題ないし、全部お兄ちゃんに任せる」

シノンも文句無いなら、シリカの意思を尊重してあげよう。

「あの、お願いがひとつあるんですが、いいですか？」

「なに？　ボクは２人を護る気満々だから、可能な限り要望を聞くよ？」

「護る……ですか？」

「うん」

「それは迷惑では……」

ボクにとって２人は大切な存在になって来たしね。

「無駄だよシリカ。だから、私達は私達でお兄ちゃんを護ればいいんだよ」

「それもそうですね。私も頑張ります」

嬉しい事を言ってくれるね。

昔から好きだった2人にこんな事を言ってくれるとは幸せだよね。

「それで、シリカのお願いってなにかな？」

「あの、私……独りっ子だったので、お兄ちゃんやお姉ちゃんに憧れてて……その……」

照れながら上目遣いという凶器を使いながらそんな事を言ってくるシリカ。

「別に呼んでも問題無いよ。ねぇ、シノンも大丈夫だよね？」

「うん、私とお兄ちゃんの関係を邪魔しない限り問題無いよ。私も妹が欲しかったし……」

「はい！　ありがとうございますお兄ちゃん、お姉ちゃん」

「妹になったんなら、怖かったり寂しかったりしたら、何時でもボク達のベットに潜り込んだ来ていいからね。毎日シノンと一緒に寝ているしね」

「はい、よろしくお願いします……／／／」

こうしてボク達のＳＡＯの生活が本格的に始まったのだった。

可愛い妹が追加されたよ。しかも、ニュータイプかイノベイターかも？

「ほら、行くよ」

「はいはい」

ボクは両手に花状態（女の子三人が仲良く手を繋いで歩いているというのは決して認めない）で、はじまりの街を周りの視線を無視して移動。

ホルンカの街にやって来ました。

「装備は問題無い？」

「うん」

「大丈夫です」

「なら、シノンにはこのマフラー、シリカには指輪をあげるね」

「「ありがとう（ございます）」」

二人に渡したのは簡単、経験値上昇効果がある装備だ。

「あの、なんで左手薬指なんですか？」
照れながら小首を傾げるシリカに答えてあげる。あっ、指輪を薬指に入れたのはボクだよ。
「害虫避けだよ」
自分の長い黒髪ツインテールを弄りながら答えた。
「なるほど、だから私にもここに嵌めさせたんだ」
シノンの薬指には万能の指輪が付いている。
「そうそう。それより、ツインテール解いていい？」
「駄目」
「絶対駄目です」
朝食食べたら、強制的にツインテールにされたんだよね。
「え〜〜」
「私の裸みたんですから、それくらいいいじゃないですか。とっても似合ってますよ」
「あれは勝手に……」
「何か？」

「なんでもないよ～だ」

頬っぺたを膨らませながら先に進む。シリカの精神も問題無いしいいや。

「今日の目的は第一層のダンジョンとラージネペント討伐だよ」

「はいはい」

「勝てるかな？」

「「余裕」」

シリカの問いに、二人でハモって答えてあげた。

リトルネペントがいた森をさらに進み、奥に進んで行く。

「怖いです……」

シリカがボクの服を掴んできた。これは無理が無い。

だって、朝方なのに、木々が日光を遮って暗く、そのせいか並木道は独特の壊さを演出している。

「戦闘音がする……」

「へぇ～、こんな早くにお仲間さんがいるんだね」

「βプレイヤーでしょうか？」

「そうだろうね」

誰が出るか楽しみだね？

「行ってみよう。いいよね？」

「「はい（うん）」」

シノンの案内に従って移動する間に、ひとつ提案してみる。

「シリカ、短剣二刀流してみない？」

「出来るんですか？」

「システム的には出来ない。でも、片手武器を片手に一本ずつ装備する事は可能だから、頑張れば出来るよシリカ」

シノンの言う通り、原作でキリトがＡＬＯ（アヴルヘイムオンライン）でやってるしね。

「それに、双剣なら防御と攻撃がやりやすいしね」

ぶっちゃけ、ＥＸスキル《二刀流》や《十字剣》は修練を積めば習得出来るように修正した。ＭＭＯなんだから、みんな努力すれば、勇者になれるチャンスをあげなきゃいけないって説得した。茅場さん分かってくれたので、条件付きの許可だったけど問題無い。

「じゃあ、挑戦しますね！」

「「頑張って」」

更に歩いていくと、ラージネペントの悲鳴が聞こえてきた。
「いた」
「黒い人……」
戦っていたのはあの黒い剣士だ。
「やっ、早いね」
「……君達もこいつらか？」
「そうだよ。あっ、シノンとシリカは先に狩りを初めておいて」
「ん」「分かりました」
とりあえず、二人を先行させた。シノンには、この辺りのプレイヤーがいないか調べて貰うしね。
「いいのか？」
「いい装備を持ってるしね」
「そのようだな。Ｗｉｋｉに乗ってた能力増強装備か……」
「そうだよ。運の要素が強いけど、なんとか手に入れたよ」
「それで、何のようだ？　その装備ならここは楽勝だろう」
やっぱり、キリト君はＰＫして来ないね。

「今から派手に狩るから、パーティー組んでご一緒しない？」

「君等に得はないだろ？」

「このまま始めるとＭＰＫになりそうだからだよ♪　あと、お兄さんが気に入ってるから」

「？　まぁ、いいよ。実際に一人じゃきついから（こんな子供をほって置くのもなんだしな）」

よし、キリト君とお知り合いになれた！

「お兄ちゃん、他に人はいないよ」

キリト君にパーティーを投げて置く。

「なら、問題無いよ。あっ、自己紹介しとこうか。ボクはレン、男だよ」

「男っ！？」

「うぅ……」

「私はシノン、お兄ちゃんの妹。もう一人がゲームの中で出会ったシリカ」

『シリカといい、ます』

「俺はキリトだ。よろしく。それでどうするんだ？」

「ふふ、狩りは簡単。シノンは実付きを狙撃。シリカはラージネペントの群れに突っ込んでシノンの射線上に敵を纏めて誘導。ボクとキリト君でシノンの護衛だよ」

『無理です！』

「その首輪全力発動で大丈夫。ボクを信じろ！」

『うぅ……分かりました』

この辺りで、現在のスペックを理解させよう。

「狙撃開始する」

銃声が響き、シリカがいる遠くの方で実付きが爆発した。

「大丈夫なのか？」

「平気平気、観てみなよ」

シリカの方を観ると、敵がシリカの速度に付いていけて無い事が良く分かる。ボク達ですら霞んで見えるからね。

「ステータスの差は歴然だな」

「でしょ？　ラッキーヒットしか……」

「あっ、シリカこけた」

「めった打ちにされてるけど……ミスと中っても1とか2ばっかだな」

予想外の速さにコントロールできなかったんだろうね。
今のシリカは足を拘束されて原作二巻のような格好になっている。

「しかし……」

「うん、触手に絡まれてる女の子ってエロいよね……」

「そうだ……って、違うからな！？」

キリト君も男の子だね。

「不潔、最低……」

シノンが無表情＋冷徹な侮蔑の視線を送ってくる。

「ぐはっ！？」

「キリト君がダメージを受けた！
そして、シノンは自分も行こうとしない！」

シノンがボクに見せる為にか、自ら動き出そうとしていた。

「ち……」

「お前等……」

「あはは……キリト君、その握った拳は収めようね？」

「ふざけ……」

『助けてくださっ……ごめんなさい、自分で何とかします！だから、シノンお姉ちゃん、八つ当たりで怒るのやめてっ！？　私は悪くないからっ！？』

シリカが助けを求めた瞬間、シノンが構えていた火縄銃から銃声とともに弾丸が放たれて、シリカの顔の真横を通って後ろの敵を撃ち殺した。
それに恐怖したシリカが、アニールダガーをもう一本持ち出して一生懸命につるを切って抜け出した。

「助けなくていいのかと聞こうと思っただけなんだけど……」

「必要無いでしょ。未熟なシリカにお仕置きだし……これで更に頑張るとおもうよ……刺されそうだけど」

「あはは……」

「二人共、ふざけてないで来た」

「「ああ」」

ボク達はアニールブレードを持ってシノンの横に立つ。シノンは火縄銃をアイテムストレージに戻して、ドラグノフを装備した。その銃はシノンの身長より少し小さいくらいだ。それを地面に横たわって狙撃体勢を取った。

「さて、目標はシリカ……」

「「「『違うから！』」」」

「の後ろの敵……」

シノンの冗談（？）で気を引き締まったボク達は、シリカが左右に移動して固めた大量のラージネペント（リトルを大きくしただけ）を一直線に並ばせながらこちらに戻って来た。ズレそうなのには、高速のヒット&アウェーで蹴りを入れて修正していた。

「私は一発の銃弾……ただ、撃ち貫き目標を滅ぼすだけ……」

「「怖っ！」」

「シリカ……飛んで……」

「ひゃいっ！」

シリカが慌てジャンプした瞬間、ドラグノフからマズルフラッシュと共に発射された弾丸は、一列に並んだラージネペントを何の抵抗もを無しに貫いていく。

更に、シノンが転がり、射線を変えて二発目を放った。

「ふぅ〜〜」

「ご苦労様……」

「間違いなくチートだな……」

キリト君の思いには概ね同意。

「じゃ、後よろしく」

シノンが近くの木の根に、ドラグノフを抱くようにして座わりながら、手を挙げてそんな事を言ってきた。

「行くか」

「そうだな……」

ボクはキリト君と一緒に残敵を滅ぼしているシリカの元に向かった。

シリカは高速で移動しながら、ラージネペントが反応できないのをいい事に、リトルネペントと同じく弱点であるつるの付け根を攻撃して殺している

「俺らも行くぞ」

「はいな！」

ボクがキリト君に迫っていたつるを切り落とし、キリトがつるの付け根を剣技を使って切り付け、ラージネペントを殺す。

「次！」

キリト君がつるを切り落とした瞬間、キリト君の前に滑り混んで、つるの付け根を切り落とす。

「さすが黒の剣士……」

「そっちも強いな……しかし……」

「ボクは、β中はクエストメインにしてたからね……後、ＧＭ（ぼそ」

「ん？　なんか言ったか？」

「気にしないで♪」

ボク達は舞うように立ち位置を入れ替えながら敵を滅ぼしていく。敵がこっちに集中すると、シリカが簡単に殺してくれるので、どんどん死んでいった。

３０分後、全ての敵が殺されＰＯＰ待ちとなった。

「酷いです……」

「ごめんって、シリカ……」

頭を撫でてやると気持ち良さそうにして、だんだん怒った顔が崩れて行った。

「むぅ……この撫で撫では気持ち良すぎてずるいです……」

「ずるい」

「はいはい」

シノンの頭も撫で撫でしてあげると、呆れた目を向けて来るキリト君がいた。

「それで、君達はどうするんだ？」

「一層のダンジョンのボスを目指すよ」

「ボスか……」

「うん、熟練度稼ぎに使うつもり。死にそうになったら逃げて仕切り直し」

「ボスがかわいそうだが、それが効率的だな」

ボスはなかなか死なないから効率的だ。

「Ｌｖが８になったからスキルスロットも増えたしね」

「バトルヒーリングがベスト」

「そうだな」

「それじゃ、行こうか。キリト君も来るよね？」

「俺もいいのか？」

「とりあえず、今日は一緒に行こうよ」

原作じゃ、ほとんど一人だからね。なら、ボク達と狩り友くらいになればいいと思う。それなら、あの人達も救えるだろう。

「分かった。よろしく頼む」

「「「こちらこそ」」」

それからボク達は、ボクとキリト君を前衛にして、次にシノン、最後にシリカという順番で、森の奥深くにあるダンジョンに潜っていった。

ソードアート・オンライン（Sword Art Online）？（前書き）

クリスマス編やお正月は遅くなるよ！（あ

ボク達は村長から報酬を受け取って、迷宮に向かった。

第一層の迷宮入口は、トトロの寝床のように大樹の根の間にあった。

「出て来る敵は植物系、リトルネペントやラージネペント、マンドラゴラで、ボスはトレントだな」

「うん、衝撃系には強いね」

「なら、私は役に立たない。任せた……」

「「「シノン（お姉ちゃん）！？」」」

そんな事を言って下がったシノンにキリトとシリカが食いついた。

「弾丸勿体ないし、威力下がるし……」

弾丸は柔軟な植物には効きにくい特性がある。

「そんなの関係ないだろ……」

「まぁ、ドラグノフの威力なら関係無いですね……」

「攻撃力１０００はだてじゃない！　だし？」

「「そうそう（ああ）」」
キリトとシリカの意見は同意だね。
「弾代で破産するって……」
「無理無理」
シノンとボクの意見は一緒。
「じゃあ、どうするんだ？」
「ジジャーン！　こんな事もあろうかと、コンポジットボウと矢を用意しておきました！？」
「準備いいな」
「ちっ」
「おい」
「まぁ、シノンの事は理解してるから、ちゃんと用意しました。短剣とかを投擲するのも辛いだろうからね」
銃を使えなくても、シノンはちゃんとするよ。できる子だから。
「まぁ、やる気があるならいい」
「キリトは心配性だね」

「うるさい。それに、レン達と違ってこちらは通常装備だぞ？」
それはそうだね。
「なら、キリト君に装備をあげよう」
「いらん」
「即答だね」
「ああ。そういうのはトラブルの元だから遠慮したい」
確かにそうだけど、そんな事を言ってる余裕は無いんだよね。
「でも、死んだらそれまでだよ？」
「ぐっ……」
「まぁ、あれだよ。出世払いでいいよ」
「しかしな……」
まだ堕ちないか……なら、とどめ。
「妹さんと親御さんが心配してるんだよ？　ここは確実に生き残る事を優先すべきだよ！　ボクが必要な時に借りを返してくれればいいからね」
「……分かった……」

キリト君に能力値上昇の装備を渡して、迷宮に潜った。

迷宮の中は根っこによって出来た洞窟みたいな所で、土が見えない。

「みんなのスキルに空きにバトルヒーリングは入れたか？」

「「「うん（はい）（こく）」」」

キリト君の質問にみんなが答えた。ついでなので、所持スキルについても言っておこうかな。

「ちなみにボクのスキルは、体術、片手剣、バトルヒーリング」

「私は片手剣が短剣ですね」

「こっちは銃、索敵、バトルヒーリング」

「俺は片手剣、索敵、バトルヒーリングだな」

索敵が二枚なら確実だね。

このゲームはデスゲームなんだから、索敵はソロじゃなくてもいる。なぜなら、擬態系のモンスターはどうしても肉眼じゃ見破りにくいからね。戦闘中に背後からの奇襲とか目も充てられない。

「キリト君、マンドラゴラはノンアクティブだから、出て来る前にボク達で殺そう。こんな風にね……」

ボクはおもむろにアニールブレードで、シノンが指差していた草を

上から剣で地面事、奥深くまで貫いた。
すると、モンスターの断末魔が聞こえて来たけど直ぐに止み、ポリゴンとなって消滅した。

「そうだな。ネペント達はシリカやシノンに任せるか。武器的にそっちの方がいいだろう」

「うん」

マンドラゴラはニンジンみたいなのに足が生えてる奴だけど、普段は地面の中に潜んでいて、刺激が無いと起きてこない。だから、ボク達は索敵で見付けて、瞬時に処理する。こいつらのハウリングは脅威だからね。

それから四時間程で第一階層の最深部のボス部屋に繋がる扉がある部屋に到着した。
ひとつ言える事はシノンさんぱねぇの一言に尽きる。だって、矢がピンポイントで弱点に百発百中なんだよ？　凄いよね。正に生粋のヒットマン。
シリカと協力して出て来た敵は、十秒と生きていた事は無いしね。
あっ、実付きが出た時は別だった。纏めてから虐殺したしね。

「さて、順番決めるよ～～」

「そうだな。まず、俺かシノンが扉の外で拠点の確保。シリカが中で助けに入る役がいいと思う」

ボクとキリト君で相談する。シリカは始めてだし、シノンはボクが失策しない限り丸投げしてくるしね。失敗しても最終的にフォロー

しまくってくれるから安心して提案出来る。

「そうだね。始めはボクとキリト君の二人でやってシリカは見学。βプレイヤーじゃないし任せるのは、パターンを学えさせた後でいいと思う。シノンは拠点の確保が適任かな」

「そうだな。二人もそれでいいか？」

「問題無い」「大丈夫です。頑張ります」

役割が決まったら部屋の隅っこを石や枯れ木や枝を退けたりして適当に掃除して寝床のスペースを作る。

そして、休憩がてらにご飯を食べて雑談をした。

「あっ、ドロップは山分け？　少し作りたいのがあるんだけどいい？」

「別に好きにしていいよ。問題無いよね？」

「ああ。ここのドロップは工作スキルが無いと使え無いからな」

「私も良くわからないですから、シノンお姉ちゃんに任せます」

「わかった。好きにする」

シノンがボク達の言葉を聞いて、少し笑ったみたいだ。マフラーで隠れているけどボクには判る。

「それじゃ、お留守番よろしく」「行ってきます」「頼む」

「行ってらっしゃい。死なないようにね」

「うん」「はい」「ああ」

ボク達はシノンに見送られながら、分厚い木で出来た扉を開けて中に踏み込んだ。

部屋の中は薄暗く奥を見渡せ無いが、中に入ると頭上から温かな光りが降りてきて、部屋全体を照らし、幻想的な光景を映し出していた。

「……綺麗……です……」

部屋の大きさは大体横縦高さ三百メートルぐらいで、天井は吹きさらしになっており、その遥か上空では太陽のような物が光りを放っている。そして、そこから発せられる光りを一身に浴びる大樹が存在した。

「さて、来るぞ……」

一定時間光りを浴びた大樹が動きだし、枝が伸びて顔が現れてくる。

「……気持ち悪い……」「ひっ！」

ボクとシリカの思いは一緒みたいだ。

「じゃあ、まずは俺から行くか？」

「いや、ボクから行くよ。危なくなったらよろしく」

「わかった」

ボクはボスであるトレントに向かって走り出した。
トレントに残り二百メートルくらい近づいたら、枝を鞭のようにしならせて打ち付けてくる。

「痛っ！」

枝に打ち付けられてどんどんＨＰが減っていく。

「よし、後一撃でレッドだ！」

「ＯＫ」

空中に跳び上がり、枝を喰らって入口のほうへと弾け飛んで行った。
ボクは空中で体勢を立て直して、着地と同時に入口に全力ダッシュ。
追撃に来る攻撃は、逆に飛び出して来たキリト君が捌いてくれた。

「ただいま」

「お帰りなさいです」

「だいたいこんな感じね？」

回復しながらキリト君の戦闘を見る。

「回復の間は交代で戦って、バトルヒーリングや体術などの熟練度を鍛えるんだ」

「わかりました。私も行ってきていいですか？」

「いいよ。ボクが回復したら、次はキリト君だからね」

「はいですっ！」

さて、これから一ヶ月はこんな生活だろうね。いやはや、楽しみだねぇ。

あっ、クリスマスイベント何しようかなーー？

Side シノン

みんなが扉を潜って行った後、私は一人になったので暇潰しを兼ねて適当に過ごす。

「やっぱり、このままここで過ごすの嫌よね……よし、やるか！」

ステータスを開いて、迷宮に潜って新たに増えたスキル枠を使ってスキルを習得する。

「さて、まずは資材ね」

ナイフを取り出して、生えてる木の根本付近に攻撃する。
何度か攻撃すると、木が倒れてきた。そして、アイテムストレージに木が出現した。

「さて、どんどんやろう……」

それから、私は木を五本用意し、ナイフで削って木材に加工してい

く。

「さて、次は削って凹凸を作りだす……」

出来た奴を組み合わせて、椅子とテーブルを作って行く。

「うん、いい感じ。次は石ね」

モンスターを殺しながら、石と枝を集めて行く。

次に石で竈を作り出して、マッチで火を起こす。竈の左右の横にＹ型の枝を突き刺し、そこに鍋を入れた棒を架ける。

「水を入れて、保存食を細かに切って具にする。手に入ったハーブとかも入れておこう」

事前に購入しておいた木のオタマで掻き混ぜて、こちらも購入しておいた調味料で味を整える。

「うん、いい感じ……」

料理をしながら、よって来るモンスターは例外無く駆逐する。

「あっ、お椀が無い……作るか……」

それから、人数分のお箸とお椀を作った。

私は人の気配で目が覚めた。どうやら、少し寝ていたみたい。

「なんか凄い事になってるぞ」

「そうだね。なにげにシノンは多才だからね」

「シノンお姉ちゃん、凄いです」

どうやら帰って来たみたい。

「ご飯も出来てるよ。食べる？」

首を傾げながら聞いてみる。

「食べる～～」「お腹空きました」「いただこうかな」

「はい、どうぞ」

お椀によそって、それぞれに配った。

「「「頂きます」」」

「どうぞ」

スープモドキを食べながらこれからの事を相談する。

「やっぱり熟練度は上がりにくい？」

「うん。でも、他のもあわせてだし、気長にやるしかないね。シノンも体術は入れといてね」

「わかった」

私は即座にステータスから先程習得した生産系スキルを消して体術

を登録した。

「しかし、問題は時間がかかる事だな。テントや寝袋は欲しいな」

「確かにそうです。野宿になるにしても、キャンプみたいなのがいいです」

「それは確かにいいね」

「なら、クエスト報告がてらに交代で町に戻るし、寝袋とか買ってくるといいかな」

確かに嫌。堅い地面だとお兄ちゃんの肌が痛む……感覚的にだけど……買い出しか……シリカが適任？

「シリカ、よろしく」

「シノンお姉ちゃん！？」

「確かに、シリカなら敵を無視して突っ切ればいいだけだな」

「ボク達の中では一番速いし、買い出しには適してるよ。だからお願いシリカ」

「お兄ちゃん……はいです」

シリカも行く気になってくれたし、色々足りない物を頼もうかな。

「じゃあ、リストを作るか」

「シノンが竈まで作ってくれたから、食材と調理道具一式……

アウトドアセットでいいか」
「大きいのがいい。私はお兄ちゃんと寝るし、シリカもそうだよね？」
「はいです！」
「でも、寝るのは多分一人か二人ずつだけどね」
「なら、三人用を一個買って、今回は使いまわしでいいんじゃないか？　寝袋だけ四個買ってね」
「そうだね」
なら、大きめの奴を一個と普通一個でいいわね。シリカに後で伝えておこう。

少ししてリストも無事に完成した。
「よし、シリカ行ってきて」
「はいです。出来る限り速く戻りますね」
「うん、よろしく」
シリカが走って行き、暇になった私は作ったテーブルに上半身を預けて眠りに落ちた。

SideOut

ソードアート・オンライン（Sword Art Online）？（前書き）

明けましておめでとうございます。今年もよろしくです。

ボク達がボスに一昼夜粘着し続けて、約一ヶ月の時が過ぎて十二月に入った。

「よっ、ていっ」

迫って来るボス……トレントの枝を次々と蹴って接近して行き、素手で殴り付け、乱打を決めてバックステップで距離を取る。

「よし、体術マスター……シリカ、スイッチ！」

「はい！」

ボスに接近して行くシリカと交代して、ボクは後ろに下がりボスの部屋から出ていく。

「お疲れ」

「ありがとう。これでようやく、体術とバトルヒーリングをマスターしたよ」

「おめでとう。これで、両方マスターしたのはシノンと二人だな」

「うん。キリトとシリカももうちょっとだし頑張ってね」

「ああ」

さすがにここ一ヶ月間、勝たないボス戦と模擬戦をずっと続けたうえに、睡眠三時間で頑張ったかいがあった。

「じゃあ、行ってくるか」

「いってらっしゃい」

ボクと交代でボス部屋に入って行くキリトを見送って、ボクはシノンの元へと向かう。

シノンは椅子に座って、ドラグノフを机の上に乗せて整備していた。

「シ〜〜ノ〜〜〜ン〜〜〜」

「きゃぁ〜〜〜〜っ！？」

後ろからシノンに抱き着いたら、猫みたいに思いっきり震えて叫び声をあげた。

「お、おにぃ、ちゃん」

「あ、あれ？」

シノンが涙目で振り向いた。しかも、その身体は痙攣を続けている。

「だ、大丈夫？」

「だいじょうぶ……じゃない……ひどい……」
なんか痙攣の仕方が……あっちの方な上に、普段強気なシノンの弱々しい姿にかなり来る物がある。
「ごめん、ごめん。ちょっと脅かそうとしただけなんだけど……」
シノンから漂って来る甘い香りと柔らかい身体。
「お兄ちゃんのせいで敏感なんだから止めて……」
「たが断る」
「……」
「それより、たまっちゃった。やらない？」
「……いいよ。私の全てはお兄ちゃんの物だし、好きにしたらいい。ただ、捨てたら……狙撃するけど」
最後のセリフに、シノンから寒気と恐怖を貰ったけど、気にしない事にする。だって、立ち上がって身を任せて来たシノンの方が大切だから。
それに、ここ一ヶ月の間、二日に一回は必ず身体を重ねてエッチして中に出している。子供は生まれないしね。

シノンを膝の上に乗せて、お互いに楽しんでいると、沢山の人がやって来た。その中には、一ヶ月の間に何度かボスを見に来ていた奴等だ。

「お兄ちゃん……んんっ……」

「大丈夫、任せて。それで、何の用かな？」

「お前は……」

「ボス待ちならちゃんと順番は守ってよ？」

ボス部屋に入って行こうとしていた。

「ざけんな！　お前等いっつもいるじゃねぇか！」

「ちゃんと並べばいいだけじゃん。ね～～」

「うん。これはマナー」

シノンと二人で注意していると、馬鹿な奴以外にこちらに近づいて来る人がいた。

「何やってるんですか！」

髪の長い閃光の女の子がやって来ました。

「お姉さん、この人が順番守らないんです」

「どんな教育を受けてるんだか……」

「ダメじゃないですか！」

さすが良いところのお嬢様、予想通りの礼儀には厳しい。

「んっ」

言い争いが始まって、ボク達から注目が逸れたので今の間に出して、色々整えた。

「お兄ちゃん、外でする時は場所を考えよう」

「だね」

多分、我慢出来ないだろうけどね。

「お茶入れる」

「お願い」

「あさ……シノン君、私の分も頼む」

ＧＭ様が現れた。

「何しに来たの？」

「何、一層を攻略しようと言う話になったので、私も参加しようと思っただけだ」

「ふ～ん、確かに攻略はそろそろやった方がいいね」

「ああ。そろそろ落ち着いた頃だしな」

そんな話をしていたら、シノンがお茶を三つ持って来てくれた。

「「ありがとう」」

「どういたしまして」

まったり、お茶を飲みながら危ない会話をする。

「死んだ人間の中で、有り得ない存在がいるが、あれはなんだね」

「ボク達に施した物をプレイヤー全員にセットしただけだよ」

「つまり、条件次第でＳＥＥＤの中で生きられるのか……」

「うん。感情や思いが強く無いといけないけど、ＳＥＥＤのネットワーク内部ならある程度自由に移動可能だから、最終的に現実にいるのと変わらない」

シノンの言う通り、最終的にＡＩと生きた人間の区別は無くなる。現実とこの世界の違いは情報量の多さだけだし、ボクの介入により、既に現実と殆ど変わらない。

「まぁ、構わんが管理はしっかりとな」

「今は眠ってるし、いつ目覚めるかはわからないけど、抹消のプログラムは用意してあるよ」

「なら問題無い。クリスマスのイベントはどうだ？」

「サンタさんでもやろうかな……」

サンタコスしたシノンやシリカは可愛いだろうね。

「プレゼントでも配るのかね？」

「それいいね。シノンは何が欲しい？」

「お兄ちゃん」

「「……」」

いや、ボクもそうだけど……絶対何か考え無いと……後が怖いな。

「愛されているようで何よりだ。イベントに関しては全て一任するから任せる」

「了解、景品にでかいのを用意しておくよ」

「よろしく頼む。そういえば、君達の母親がＳＡＯの被害者関連に莫大な資金を投じているが、構わんのかね」

「大丈夫、データは渡してあるから、国家予算くらいはあるし、持つよ」

遺伝子や整形関連の技術はアメリカが高く買ってくれるしね。

「お母さんなら大丈夫。資金運用に関しておかしいから」
チートクラスだよね。預けたお金が一ヶ月で数倍だし、有り得ない。
「そうか……どうやら、あちらは終ったみたいだね」
閃光さんがこちらにやって来た。
「さっきはごめんなさい。しっかり注意しておいたから安心して」
「うん。それで、お姉さんはこれからどうする？」
「時間まで待つわよ？」
「倒してるかもしれないよ？」
「攻略が進むならそれで良いわ」
さすがバトルマニアの閃光……いや、今は攻略マニアかな？
「わかった。なら、今入ってる二人が終わればどうぞ」
「ええ」
それからしばらくして、シリカだけが帰って来た。
「あれ、キリト君は？」
「ボス倒したから、ゲート起動して来るだって。合流は二階層にある村だって」

成る程、押さえに向かったか。あそこは数限定のパーティークエストがあるしね。報酬は宿屋が安く泊まれたり、買い物が安くなる会員カードを貰えるスタンプカード。貯まったら色々お得の一品だよ。

「え〜〜と、集まってる皆さんにご報告です。第一階層は攻略されました」

「「「ふざけんなっ！」」」

「ふざけて無いよ。オンラインゲームなんてリソースの取り合いだからね。先に倒した方の勝ちだ。それじゃ、ボク達は撤収するよ」

「準備出来た。行こう」

いつの間にか、シノンが綺麗に片付けてくれていた。

「まちやがれっ（待ってください）！」

「ひぅっ」

シリカが脅えちゃったじゃないか……殺すぞ？

「何、犯る気？　いいよ、そんなに死にたいなら、ボクが殺してあげる」

「やってや……「「友達になってください（詰ってください！）！」」」

あはは……ボクは思わずずっこけちゃったよ。しかも、詰れっ

て何？

「だが断る」

「ツンデレ」

「ツインテール」

恐っ！　何これコイツ等マジ恐い！

「まぁ、私はちゃんとなって欲しいけど……」

「前向きに検討しますっ！」

そう言って、シノンとシリカの手を掴んで逃げました。

それから、キリト君と合流してクエストを手分けしてこなし、スタンプカードを埋めてカードを手に入れた。

「ドロップや報酬は山分けでいいよね？」

「あ～～俺はいいや。これを借りてるしな」

「いや、それは別の時……具体的に言うと、ギルド作る時に加入して貰うから別にいいよ」

「ギルドか……それくらいなら別にいいが……一応貰っておく。まだまだ揃える必要があるしな」

「うん。それで、ここからは別行動だね」

「そうだな。基本的にソロで行くつもりだしな」

ボクもシリカやシノンと途中から別れて、バラバラに行動するつもりだしね。拠点は一緒で、狩りはソロかペアの方が基本的に経験値効率がいい。

「んじゃ、年明けから暴れるつもりだし、その時は呼ぶね」

「何する気なんだ？」

「ただのレースだよ」

「成る程、レースか」

お互いにニヤリと笑いあって別れた。

それから、買い物から帰って来た二人に報酬を渡して食事を取り、部屋に入って仲良く三人で寝ました。

ちなみにシリカがいるから、普通に寝ましたよ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2266z/

ステラになってＳＡＯで大暴れ！

2012年1月7日00時46分発行